

客室乗務員に見る化粧の可能性

——接近と距離化のスキルという観点から——

Possibility of Cosmetic Activity to Consider from Cabin Crews:
A Viewpoint of Approaching/Distancing Skills

枝 川 碧

Aoi EDAGAWA

(日本女子大学大学院人間社会研究科 現代社会論専攻博士課程後期3年)

要約

本研究は旅客機の客室乗務員が施す化粧には、規定に沿って化粧を行う（規範）、行いたくない（自由、個人の考え）という二つの領域を行ったり来たりする以上の意味があるということを接近と距離化の概念から考察する。通説では、社会は女性に美を追求するように仕向けるとされている。吉澤（1997 = 2013）は、客室乗務員が、「『美』をめぐる基準」（ibid.:191）のトップに位置していると考ええる。これに対し、女性の主体性を重視する見方もある。以上の議論とは異なり、化粧を行うことは、接近と距離化のスキルであると捉えることで、化粧を分析する。

本論文では、二名の客室乗務員のインタビューを分析対象としている。対象者のうちの一人はサポートをする存在としての自分、もう一人は人命にも関わる仕事をしているという責任感を持った自分として、個々の役割を捉えていることなども考察し、吉澤の言う「基準」を絶対視しない生き方についても考える。

[Abstract]

In this paper, I demonstrate the significance of makeup activity by airline cabin crews which is included in neither freedom nor conforming to norms for makeup. As a common theory, there is a tendency for society to make women pursue beauty. Yoshizawa (1997 = 2013) believes that the cabin crews are located at the top of “standard of beauty” (ibid.: 191). On the other hand, there is a view that emphasizes women's subjectivity. Differing from the above arguments, I analyze makeup from the viewpoint of the approaching/distancing skills based on interviews with two female cabin crews. The interviewees recognized their fundamental social roles; one stated that she takes the role to support others and the other stated that she takes the role to protect human lives. These statements lead to the conclusion that cabin crews distance themselves from the “standard” proposed by Yoshizawa.

0. はじめに

本稿の目的は、旅客機の客室乗務員¹⁾が施す化粧を、規範と自由という観点ではなく、接近と距離化という概念から分析すること目的とする。客室乗務員の化粧には、細かな規則があり、会社の求める規定に沿った化粧を行う必要がある。しかし、会社の求める化粧を行うということは、個人としての自由な化粧をするという行為とは逆の行為となる。ここで、単に化粧を行う（規範）、

行いたくない(自由, 個人の考え, もっと化粧を行いたい, というケースもあるだろう)という二つの領域を行ったり来たりするものなのだという見方では, 客室乗務員の化粧を捉えることはできない。二つの領域を行ったり来たりするという見方ではなく, 接近と距離化という概念を通して, 客室乗務員の化粧を考察する。

化粧を巡る規範と自由, 個人の考えについて本論文での定義をここで述べる。規範は, 社会の要請に従い行う化粧とする。自由, 個人の考えは, 社会の要請と関係なく, 自分がしたいと思う化粧や, したくないと思う化粧など, 自分が思う化粧について表すときに用いることとする。また, 規定という言葉も用いているが, 航空会社の定める化粧などに関する服務規程のことを指す。規定も, 規範に含まれるが, 規定と表現している場合は, より具体的な規範という意味合いで用いている。

本稿では, 規範に従った化粧について考察する際に有効だと考えられる, 今村仁司の「量的測定の対象」(今村1988:181)への批判や, Susan Bordoの「文化的なイメージ」への批判(Bordo1997=1999:1), 吉澤夏子の「『美』をめぐる基準」(吉澤1997=2013:191)という「基準」への批判を考察した後, 化粧を行う本人の主体性の観点から考える場合に有効だと考えられるデイヴィスKathy Davis (1995=2008)の主体性を重視する見方を検討する。まず, 労働論の観点から, 客室乗務員の化粧の立場について考察を少し行っておくこととする。客室乗務員については, Arlie R. Hochschildの感情労働論(Hochschild 1983=2010)から論ずるのが通常であろうが, ここではさらにその根底にある労働論から始めることにする。たとえば今村の労働論において, 南太平洋ニュー・ブリテン島におけるマエンゲの人々の美的労働の事例が紹介されている。マエンゲにおける仕事の「第一の評価基準『美』」(今村 前掲書:18)があり, 「幾何学的構図, 清潔, 色彩の構図のひとつひとつが評価の対象になる。」(今村 前掲書:161)という。「美」として評価されるものは, タロイモなどを植えている畑である。これは, 今村が美と労働が結びつく場合の理想の形と考えることができる。ここで取り上げられている美とは, 畑の造形に関するものであるが, 一つの美を実現しようとすることは, 拡張すれば, 客室乗務員が化粧を行うことによって実現しようとする美と通じるものがあると考えられる。

しかし他方, 今村は次のようにも述べている。

資本主義的商品・貨幣経済の下では, いっさいの物が交換価値として同質化する。「奴隷的」労働の産物も, 職人的仕事の産物も, いやそれどころか行為 = プラークシスですら, 交換価値をもち, 全面的に量的測定の対象となる。交換価値の支配の下では, 物や活動がもっている「質的性格」, 各々の物や活動の特異性や異質性は解消し, 単なる価値量へと還元される。差異があるとすれば, それは量的差異でしかない。この量化傾向は近代の特徴であって, これが近代の活動観をとらえることになる。(今村 1988:181)

この引用からは, 働いて産みだされたものは, 量として数えられ, その量としての一つ一つの違いはなくなり, 交換できるもの = 商品と見なされていることがわかる。客室乗務員は, 美と結びついて働く存在ではあるが, 一つの商品として見なされてしまう側面も持ち合わせていると言える。つまり, 美と結びつく化粧が, 商品として見なされ, 「量的測定の対象」(今村 前掲書:181)

の一環となっている。

今村の労働論の観点を援用して、「量的測定の対象」(今村 前掲書:181)としての美への批判を考えたが、ボルドーは、文化的なイメージとの親密な関係について、批判的に論じており(Bordo 前掲書:1)、現代では憧れる誰かになることが出来ると考える人々が多く、そのように考えるようにさせられていると、考察していると言えるだろう。文化的なイメージが常に存在し、押し付けられていることを指摘している(Bordo 前掲書:8)と考える。

「量的測定の対象」(今村 前掲書:181)、「文化的なイメージ」(Bordo 前掲書:1)への批判を見てきたが、吉澤は、「『美』をめぐる基準」(吉澤 前掲書:191)という「基準」への批判を行っている。客室乗務員を吉澤は、「『いい女』」(吉澤 前掲書:191)「『序列化』の最高位にランク」(吉澤 前掲書:191)されていると見なし、客室乗務員は、「『美』をめぐる基準」(吉澤 前掲書:191)という絶え間ないものに取り巻かれている存在として見ている。

ボルドーの「文化的なイメージ」への批判(Bordo 前掲書:1)や吉澤の「基準」(吉澤 前掲書:191)への批判は、美しさというものは、社会が求めている存在であり、その存在に従って人は生きている存在であるということを示唆していると考えられる。

この美しさを、化粧によって作られる美しさとして考えるなら、服務規定という規範に沿って化粧を行う、行わざる負えない存在として、客室乗務員が浮かび上がる。

もう一方の行いたくない(自由、個人の考え)に関連していると言えるのが、デイヴィスである。デイヴィスは、美を追求することを、女性達の自主性の観点から着目している。

しかし、このように、規範に沿って化粧を行う、行いたくない(自由、個人の考え、もっと化粧を行いたい、というケースもあるだろう)という二つの領域のみに注目して、客室乗務員の化粧を分析することは、現実的と言えるのだろうか。今回、インタビューを行った客室乗務員は、化粧を行うことで、それぞれの「会社のイメージ」や、客室乗務員らしさを表現している。このことは、適切な接近と距離化という概念によって分析することができると考える。また、客室乗務員としての個々の役割を認識して職務にあたっていることが伺えることから、「『美』をめぐる基準」(吉澤 前掲書:191)を絶対視しない生き方があることも、本論で提示していきたい。

1. 規範に沿って化粧を行うこと

この節では、ボルドーの「文化的なイメージ」(Bordo 前掲書:1)への批判や吉澤の「基準」(吉澤 前掲書:191)への批判の見方を用いて、規範の中でも、客室乗務員にとって大きな意味合いを持つ服務規定に沿って化粧を行うことを考察する。

ボルドーは、今日の人々は、現代のアイドル(icons)が、魅惑的な手の届かない世界にいると考える人はほとんどいないし、アイドルのようなきらびやかなライフスタイルは持たなくても、少なくとも身体は手に入れられると信じるように勧められていると述べている(Bordo 前掲書:8)。

このように、ボルドーは、現代では憧れる誰かになることが出来ると考える人々が多く、そのように考えるように勧められている仕組みがあることを示唆している。

ボルドーのこの見方を客室乗務員の化粧にあてはめてみるなら、客室乗務員も理想とする客室乗務員像を手に入れられると考え、理想の客室乗務員としてふるまうために、規範に沿った化粧

を行う存在であると言えることができる。と考える。

次に、吉澤の説を見てみる。

ではその「価値」とは何か。そこにはさまざまな要素が複雑に絡み合っている。しかしその「価値」の中核にあるのは、明らかに女性としての価値の高さであり、そしてその価値の高さを図るのは、やはり「美」をめぐる基準なのだ。スチュワーデスであるということは、この社会において、すでに「序列化」の最高位にランクされている、ということの意味しているのである。スチュワーデスであることは、ニュースキャスターであること、アナウンサーであることと並んで、この社会でもっとも評価される女性、すなわち「いい女」であることの、もっともわかりやすい指標なのである。(吉澤 1997 = 2013:191 傍点は原著者)

吉澤にとって、客室乗務員という職業は、社会の中に存在する女性への見方を裏付けるものであり、女性は「『美』をめぐる基準」(吉澤 前掲書:191)という枠組みの中で生きているという見方をしていると言える。

「さまざまな要素」には、客室乗務員の場合は、服務規定が含まれている。この服務規程によって、客室乗務員は、客室乗務員らしさを与えられていると推測される。

また、客室乗務員は、「この社会において、すでに『序列化』の最高位にランクされて」(吉澤 前掲書:191)いる存在ではあるが、客室乗務員としての存在を示すには、「序列化」(吉澤 前掲書:191)の中で「最高位」(吉澤 前掲書:191)を保つため、客室乗務員らしいとわかる、規範に沿った化粧をする必要がある存在だと言えるだろう。客室乗務員は、「基準」(吉澤 前掲書:191)を作り出す側でもあり、この「基準」から逃れられない存在であると吉澤は考えていると言える。

では、実際に客室乗務員自身は、自らの化粧をどのように捉えているのだろうか？ここまで考察してきた、ボルドーの「文化的なイメージ」(Bordo 前掲書:1)への批判や吉澤の「基準」(吉澤 前掲書:191)への批判が、客室乗務員の化粧観に、どのようにあてはまるのか、またあてはまらないのかを考察していくこととする。

筆者が行った客室乗務員であるBさん²⁾のインタビューを見てみよう。

枝川：分かりました。じゃ、次の質問なんですけど、(Bさん：はい。) えーと、お化粧や服装に関する服務規程っていうのが、あの、あるかと思うんですが、(Bさん：うん。) それについて、あの、どういう、えーと、感想とか (Bさん：うん。) 意見をお持ちなのかなっていうのを、ちょっと伺いをしたいんですけども。

Bさん：はい。この、最初に見た時に、やっぱ、ほんとに細かくて多いなって (同席者：うーん。) いうの、印象がすごいあったのは覚えていて。(枝川：うーん。) こう、例えば、その、爪は何ミリとか、(笑い)、(枝川：うーん。) こう髪形、髪の色も、ま、少しは染めるのも出来るんですけど、こう、何号までとかっていう、(中略)

このように、Bさんの話からは、さまざまな細かな規定があることがわかる。ボルドーは、憧れている誰かを、常に人々が刷り込まれていることに疑問を持っていると言える。憧れる誰かに

なることを、人々へ強制をするわけではないが、このようになった方が良いという理想像は人々の頭の中に植えつけられ、その理想像を追い求めて、理想像のようになる必要があるのではないか、と思うようになる。客室乗務員の場合は、理想の客室乗務員としてふるまうために用意されている会社の指定する細かな「爪は何ミリ」や、「何号まで」と決まっている「髪の色」という規定に沿った化粧を行うことによって、理想の客室乗務員を求める状況が作られていくと言える。と考える。

Bさんは、次のようにも話をしている。

(中略) けっこう、すごく細かい規定があつて (枝川：はい。) なんか、はあ～って、けっこう最初の頃は (枝川：(笑い)) 思ってた記憶はあるんですけども。

吉澤の「基準」(吉澤 前掲書:191)への批判から考えられる、客室乗務員としての存在を示し、「『序列化』」(吉澤 前掲書:191)の中で「最高位」(吉澤 前掲書:191)を保つためという要素もある客室乗務員らしいとわかる化粧を行うことへの「はあ～って、けっこう最初の頃は(枝川：(笑い))思ってた」という、客室乗務員になり、最初の頃であっても、考えていたという発言から、規範的な化粧への負担感を伺うこともできる。

ボルドーの議論や吉澤の「基準」(吉澤 前掲書:191)への批判によれば、化粧によって達成しようとする美しさというのものも、社会が求めている存在であり、その「基準」(吉澤 前掲書:191)に従って人は生きているが、負担感を見ることができると言える。

2. 自由・個人の考えで化粧を行うこと

今までは、規定に沿って化粧を行う(規範)という観点から、客室乗務員の化粧について考察を行ってきた。ここでは、自由、個人の考えという観点から、考察を行う。

デイヴィスは、ボルドーの主張に反対している。美容整形を行っている女性にインタビューを行った結果に基づいて、より美しくなりたいから美容整形をするのではないという説明を行ったり、誰かから圧力をかけられて手術を受けるわけではなく、手術を受けるために、反対を乗り越えることがあること(Davis 前掲書:161)、美容整形は何となく道徳的に問題があると女性達が考えていること(Davis 前掲書:162)などと述べたりしている。

このようにデイヴィスは、美容整形を受ける女性の自主的な面を捉え、女性を単に美容整形を受けさせられている犠牲者として扱うことに疑問を持っていると言えるだろう。

ここで、再び、Bさんのインタビューを見てみよう。

枝川：わかりました。ありがとうございます。じゃ、次、あの、何をすることを、化粧だと思ふかっていうのを、ちょっと教えていただきたいんですけども。

Bさん：お化粧って…まあ、多分、体、まあ、自分をなんか、こう、磨くとか美しくするみたいなことが、私の中では、ま、お化粧かなと思うんですけども。ま、もちろん、顔に施したり…うーん、まあ、髪形とか爪を、まあ、きれいにしたりとか、そういうことも、うーん、まあ、お化粧の一つなのかなっていうふうには、思ってます。

Bさん自身の化粧の捉え方は、「体、まあ、自分をなんか、こう、磨くとか美しくする」ということが主な部分であると言える。Bさんは、デイヴィスがインタビューをしたような女性達とは、異なった考えを持っているが、Bさん自身が、「体」や「自分」を化粧と結びつけて、「磨くとか美しくする」と、自主的に定義する面も持ち合わせていると言えると考ええる。

デイヴィスが取り上げているのは、美容整形によって追求される美であるが、女性が美しさを求める時に、自主性に注目するということは、化粧について分析する場合にもあてはめられるし、この観点は部分的にはBさんにも適用することができると思われる。

3. 接近と距離化から考察する化粧

ここまで、規範に沿って化粧を行うことと、自由・個人の考えで化粧を行うことの観点から考察を行ってきた。本節では、この二つの領域のみで化粧が行われているわけではなく、客室乗務員として行なわれている化粧が、適切な接近と距離を測り、コントロールするという側面があるということを検討する。

ここで着目したいのは、客室乗務員が、化粧を重視することで会社の社風や想いを体現している存在でもあることである。サービス規程についてBさんが感想や意見を述べている部分を、さらに考察する。

Bさん：(中略)ま、実際働いてみて(枝川：はい。)まあ、でも、やっぱりそれなりに規定っていうのは必要なんだなっていうのは思って。その、そう思ったのも、やっぱり会社の制服を着て、人のお客様の前に出るっていうのは、やっぱり、自分の好きな化粧、好きな形でやったら、やっぱり、うーん何て言うんだらう、統一感(枝川：うーん。)が無い、無くなってしまう(枝川：うーん。)から、こう会社のカラーとか会社のイメージを、やっぱり、それなりに、何て言うんだらう、出す仕事でもあるなっていうのも感じたので、それなりに、こう、個性を消すっていう形でもないですけど、それなりに、枠にはめた上で、こう、個性を出していくっていう形の最初の基本？、(枝川：うーん。)っていうものなのかなって思って、(枝川：うんうん。)なんか、ちょっと、後々、分かった気がします。(笑い)。

Bさんは、規定の必要性を感じるようになり、化粧などを通して、自分が「統一感」や「会社のカラーとか会社のイメージ」を出す仕事を行っていることを感じている。

ボルドーの説から考えてみた場合、理想の客室乗務員像になるように仕向けられていると考えることや、吉澤の「基準」(吉澤 前掲書:191)への批判から、「『序列化』」(吉澤 前掲書:191)の中で最高位を保つために行なわれる化粧として見ることもできるが、客室乗務員自身が、どのような存在として、会社の中にいるのかを冷静に理解して、一つの形式を表現していると言える。

次に、以上の化粧によるコントロールを行っていることを、客室乗務員が意識をして行っていることを、適切な接近と距離化という概念から、考察する。

心理学者の石井佑可子は、メタ認知が高い場合と低い場合の対人的接近スキルや距離化スキルについての大学生、大学院生を対象とした実験的な研究を行っている(石井2010)。この実験的

な研究を参考にして、接近スキルと距離化スキルを次のように定義してみた。

接近スキルは、人との関係に親しみを与え、関係を保つようにするスキルとする。距離化スキルは、文字通り、人との関係に一定の距離を保つようにするスキルとする。また、石井の研究は、メタ認知に注目して実験を行っている。メタ認知は、石井を参考に、本人が、自分が行っているふるまいが、どのぐらいその場に即しているものなのか、また自分のふるまいをどのように捉えているのか、とする(石井2010:114)。

この「接近と距離化」は、Norbert Eliasによる『参加と距離化—知識社会学論考—』(Elias 1983=1991)にも関係がある。

感情関与の強さと深さ、つまり、彼らの考え方に従えば、自分たちの生活に影響を及ぼすことのできるすべての出来事に人間が参加する強さと深さは、距離化、つまり、感情抑制の度がより強まった場合にみられる特有の問題——すなわち、「これは何だ。なぜこれらはそうなのか」や「これは、私にとって、またわれわれにとっての意味と切り離して、それ自体として見ると、何であるのか」などといった問い——に取り組む余地を少ししか残さなかった。(Elias 1983=1991:85-86)

以上の引用から、エリアスが、人々の参加への関心と、それに対して感情を抑える距離化を行っていることに関心を持っていることがわかる。上記の石井の研究と、エリアスの概念から、「接近と距離化」を考察することとする。

Bさんの事例を見てみよう。

「会社のカラーとか会社のイメージを、やっぱり、それなりに、何て言うんだらう、出す仕事」と、自らの仕事を捉えていることは、会社という集団レベルでの接近と距離化として見ることも可能だと考える。その会社らしさを表現することによって、ある会社の客室乗務員だと人々に印象付けることができる。その印象付けは、例えば、よくその会社の飛行機を利用する人ならば、親しみを覚える効果をもたらす(接近)、一方で、きちんとした佇まいからは、気軽に何でもかんでも声をかけることはしづらい(距離化)、というスキルとして見る可以考虑。

では、個人レベルでの接近と距離化を見ることはできるだろうか。

枝川：へえええ、そうなんですか。口紅の色は、ちなみに、やっぱりこう…鮮やかな色というか、の方が望ましい(Bさん：うん。)っていうことなんですか？

Bさん：そうですね。割と、(枝川：はい。)まあ、傍から見たら濃いなあって思われるような、けっこう、お化粧。ま、それは多分、イメージを持たれてるかなっていう。周りの方には思うんですけど。ま、実際にも、機内って、少し暗くて、(枝川：はい。)なんか、こう密閉されてるから、こう。って電気を消したりもするじゃないですか。(枝川：あ。そうです、寝る時(Bさん：うん。)消します。)そういう時に、やっぱりこう、健康的に見えるメイクっていうのがやっぱりあって。そういう、ことで、普段きれいにしているメイクとはやっぱりちょっと違うよっていうのを、その、メイクの時間に(枝川：あっ。)学んでました。

Bさんの、暗くなった機内でも「健康的に見えるメイクっていうのがやっぱりあって。」という発言から、健康的に見える化粧によって、相手に親しみを与えるスキル(接近)である一方、「普段きれいにしているメイクとはやっぱりちょっと違う」化粧をすることで、他の人々とは違いを出すスキル(距離化)を見ることができる。

4. 対峙・受け止める生き方

「1.」から「3.」まで、客室乗務員にとって化粧が規範として作用すること、しかし、客室乗務員自身は、規範とは異なる化粧に対する考えを持っていること、規範を理解し、適切なコントロールのスキルとしていることを考察してきた。

最後に、吉澤の「『美』をめぐる基準」(吉澤 前掲書:191)を絶対視しない生き方について考察する。客室乗務員は、「基準」(吉澤 前掲書:191)と、どのように向き合っているのかを分析することとする。

吉澤は、女性たちの考え方や生き方を、どのように考えているのだろうか。

「いい女」とは、女性たちの気持ちの中では、けっして男性に従属するだけの、従順でやさしくてかわいい女、を意味しているわけではない。もちろん女性たちは、そうありたいと思っているかもしれない。しかし同時に、仕事のできる、尊重されるような人間、主体的な人間でありたい、とも思っているのだ。それが現代女性のイメージする「いい女」であろう。だから、自立した人間になることも、「美しくあること」と同じように、女性たちにとっては重要な課題として受け止められている。しかし、この二つのことは、彼女たちにとっては、その両方を達成することのとても難しい、そういうものとして理解されている。そしてこのことは、「頭」(論証的意識)においてというよりは、身体的な水準(実践的意識)においてより深く理解されていることかもしれない。女性たちは、現代社会において、それ自体矛盾に満ちた身体を生きることを余儀なくされている、と言ってもよい。(吉澤 1997 = 2013:194 傍点は原著者)

上記の引用から、吉澤が、「『美しくあること』」と「仕事のできる、尊重されるような人間、主体的な人間でありたい」という思いの両立を困難なものとして捉えていることがわかる。吉澤は、一章で見たように、客室乗務員を「『いい女』」(吉澤 前掲書:191)という存在として捉えているが、客室乗務員自身は、自らの存在を、両立の困難な存在として捉えているのだろうか。

客室乗務員である A さん³⁾の話を見てみよう。筆者が、客室乗務員になろうと思った理由を尋ねている部分である。

A さん：○○○(聞き取れず) 幼い頃からのずーっとなりたかったの。なんか理由…なんだったかな(枝川：そうなんですね。) っすすごい思うんですけど(枝川：はい)。まあ、でも、幼い頃にこう、自分が将来何になりたいかなんて言った時に、多分、花屋さん、とか(枝川：うーん。) 看護師さんとかっていう中の一つに多分その頃から、あって。(枝川：はい。そうだったんですか。) うーん。で、何となくやっぱ華やかに見えるなあっていうところか

ら多分入ったんだと（枝川：うーん。）思うんですけど。まあでもこう、就職とかを考えていく中で（枝川：うーん。）、ただ華やかなだけじゃなくて、やっぱり人の命とかにも、ちょっと関わってくるとか、こう安全を守るっていうところで、すごい責任感が重要な仕事なんだよっていうことを（枝川：はい。）思・・・、気づいた時に、こう、笑顔の裏になんか隠された強さっていうか（枝川：うーん。）（笑）、うーん。

Aさんは、客室乗務員であることを、「何となくやっぱ華やかに見えるなあ」という気持ちから、「ただ華やかなだけじゃなくて、やっぱり人の命とかにも、ちょっと関わってくるとか、こう安全を守るっていうところで、すごい責任感が重要な仕事」であることを理解していつている。客室乗務員として、化粧による美しさを求めるだけではなく、また『『いい女』』（吉澤 前掲書:191）という存在として、『『美』をめぐる基準』（吉澤 前掲書:191）に存在していること以上に、客室乗務員である意義を自覚していると言える。と考える。

次に、Bさんの話を見てみよう。客室乗務員になろうと思った理由を尋ねている部分である。

Bさん:(中略)中学生の時に、私初めて飛行機に、乗ったんですけども、その時に、あの、ま、家族と、祖父母と一緒に、あの、いとこを尋ねる旅行だったんですね（枝川：うーん。）。で、その時は、あの、うちの祖母が、あの、足がずーっと、（枝川：はい。）まあ、悪くて、（枝川：はい。）ま、飛行機に乗ったこともなくて、（枝川：うんうんうん。）やっぱ、すごい不安な気持ちを抱えながらも、初めての海外旅行っていうのも（枝川：はい。）あつて、（枝川：はい。）ま、ちょっと不安そうな姿を見てたんですけども。（枝川：はい。）機内で、すごく、なんて言うんだらう、色々ケアしてくださったり、サポートしてくれる姿と、そういう姿勢があったお蔭で、まあ、すごく楽しく旅行に行くことができて。（中略）

Bさんは、祖父母との旅行をきっかけとして、「機内で、すごく、なんて言うんだらう、色々ケアしてくださったり、サポートしてくれる」客室乗務員と接することにより、客室乗務員になりたいと思ったという。Bさん自身も、サポートをする客室乗務員としての自分をイメージし、意識していると言える。と考える。Bさんの客室乗務員の捉え方からも、決して『『美』をめぐる基準』（吉澤 前掲書:191）に飲み込まれることなく客室乗務員という自分を持っていると考える。

吉澤は、「女性たちは、現代社会において、それ自体矛盾に満ちた身体を生きることを余儀なくされている」（吉澤 前掲書:194）と述べている。『『美しくあること』』（吉澤 前掲書:194）として、化粧を行うことも必要とされる客室乗務員は、より「矛盾に満ちた身体」（吉澤 前掲書:194）であると言えるが、客室乗務員のAさんの事例は、どうだろうか。

枝川：ああ、そうなんですか。

Aさん：で、そこで、もう、分厚く塗っていく方に行くのか、（枝川：はい。）私はそこで、ちょっと美容の力に頼ったんですけど（枝川：うーん。）そっちで、ま、極力何もしないで、元に戻していきましょうっていう…（枝川：うーん。）ちょっとこう、あの、（枝川：うん。）エステサロンに出会ったので（枝川：はい。）。今は、あの、素肌の上にちょっと色を載せてる

ぐらいに（枝川：うん。）してるんですね。（中略）

Aさんは、エステに行くことで、「『美しくあること』」（吉澤 前掲書:194）として、化粧を行うことも必要とされる環境において、自分なりに主体的に化粧と向き合い対策を考え、受け止めていることが、できていると言えると考える。化粧との対策を通して、「身体的な水準（実践的意識）」（吉澤 前掲書:194）において、矛盾への対応を行っていると考ええる。

Bさんは、インタビュー時は育児休業中であった。このことは上記の矛盾からの離脱と考えることもできるが、退職するのではなく休業という形とすることで、化粧と向き合い、「身体的な水準（実践的意識）」（吉澤 前掲書:194）のレベルで、矛盾と対峙しているという解釈も可能であると言えるのではないかと考える。

5. おわりに

本論文では、まず、今村の「量的測定の対象」（今村 前掲書:181）への批判や、ボルドーの「文化的なイメージ」への批判（Bordo 前掲書:1）、吉澤の「『美』をめぐる基準」（吉澤 前掲書:191）という「基準」への批判を考察し、また、客室乗務員へのインタビューから、規範に沿った化粧を行うことについて述べた。規範に対する負担感があることも考察することができたと考ええる。さらに、デイヴィスの説を考察し、自主性を持って美しさを求めることについて考察を行った。

しかし、客室乗務員の化粧が、会社の社風や想いを表現することができるものでもあることや、接近と距離化という考え方から、親しみやすさを表現する一方で、気軽に接する存在ではないことを示している可能性を考察した。

最後に、客室乗務員のAさん、Bさんのそれぞれの客室乗務員という仕事、化粧との向き合い方から、吉澤の言う「矛盾に満ちた身体」（吉澤 前掲書:194）を生きながら、受け止め、対峙している可能性があることを提示した。

客室乗務員の行う化粧には、「基準」（吉澤 前掲書:191）が内包された「矛盾に満ちた身体」（吉澤 前掲書:194）が表現されている。しかし、その「身体」（吉澤 前掲書:194）を生きるスキルは身に着け得るものである可能性があることが、本論文で示すことができたと考ええる。また、そのスキルは、客室乗務員ではない女性にとっても有意義なものとなるであろうと考える。

【注】

- 1) 本稿で対象とするのは旅客機で仕事を行う客室乗務員である。以降は「客室乗務員」と表記する。
- 2) Bさんへのインタビューは、2015年9月6日に行った。インタビューの場には、Bさん、筆者、同席者の3名がいた。Bさん（インタビュー時34歳）は、大学卒業後、航空会社にて客室乗務員として勤務。インタビュー時は育児休業中。勤続年数は、育児休業期間中も含め13年となる。
- 3) Aさん（インタビュー時30台前半）へのインタビューは、2015年8月19日に行った。インタビューの場には、Aさん、筆者、同席者の3名がいた。Aさんは、大学卒業後、航空会社にて客室乗務員として勤務。勤続年数は、10年以上。

[文献]

- Black, Paula 2004 *THE BEAUTY INDUSTRY: Gender, Culture, Pleasure*, Routledge. (ブラック, ポーラ (鈴木眞理子 訳), 『ビューティー・サロンの社会学——ジェンダー・文化・快樂』新曜社, 2008年).
- Bordo, Susan 1997 (First Paperback Printing 1999) *Twilight Zone : The Hidden Life of Cultural Image from Plato to O.J.*, University of California Press.
- Career Garden 「客室乗務員の仕事」 <http://careergarden.jp/cabinattendant/work/>
(2015年4月15日閲覧)
- Davis, Kathy 1995 (Transferred to Digital Printing 2008) *Reshaping the Female Body: The Dilemma of Cosmetic Surgery*, Routledge.
- Elias, Norbert 1983 *Engagement und Distanzierung Arbeiten zur Wissenssoziologie I*, Suhrkamp Verlag. (エリ阿斯, ノルベルト (波田節夫/道旗泰三 [訳]), 『参加と距離化—知識社会学論考—』法政大学出版局, 1991年.)
- Hochschild, Arlie Russell 1983 *THE MANAGED HEART: COMMERCIALIZATION OF HUMAN FEELING*, University of California Press. (ホックシールド, アーリー・ラッセル (石川准・室伏亜希 [訳]), 『管理される心——感情が商品になるとき』世界思想社, 2010年.)
- 石井佑可子, 2011 「対人的接近——距離化スキルの機能 —相手との関係性別分析—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 50巻, pp111-118.
- 今村仁司, 1988 『仕事』弘文堂.
- 西倉実季, 2005 「「美」を論じるフェミニズムの課題—二元論的思考を超えて—」Ochanomizu University Web Library-Institutional Repository, [http://hdl.net/10083/3855\(61-67\)](http://hdl.net/10083/3855(61-67)). (2015年6月8日閲覧)
- 吉澤夏子, 1997年 (2013年POD版) 『女であることの希望—ラディカル・フェミニズムの向こう側—』勁草書房.